

平成 30 年度霞ヶ浦学講座 第 6 講 実施報告

実施日時：平成 30 年 8 月 23 日（木）9：00－16：30 参加者数：35 名

場所：タカノフーズ(株)納豆工場・博物館，小美玉市小川資料館，

講師：タカノフーズ社員，本田信之（小美玉市学芸員），沼澤篤（霞ヶ浦環境科学センター嘱託）

テーマ：バス見学ツアー「タカノフーズ工場・納豆博物館で学ぶ霞ヶ浦と納豆の関係，小美玉市小川資料館で学ぶ霞ヶ浦の水運で栄えた旧小川河岸」

要旨：発酵食品としての納豆のルーツや現代の最新設備での生産工程，排水処理技術は，タカノフーズ(株)納豆工場・博物館の展示や担当者の解説で詳しく知ることができました。納豆には，大粒，中粒，小粒の大豆が使われます。茨城県の名産品「水戸納豆」はなぜ小粒なのでしょう。茨城県は低湿地が多く，かつて洪水被害が多発したため，秋の水害前に収穫できる極早生種の小粒大豆を播種しました。大豆は水田の畦（くろ）に植えることが多く，水害を受けやすかったのです。畦は肥沃な田圃の土で畦ぬりするため，水害がない年は大豆がよく稔りました。現代では，転作奨励金が交付されたことから，桜川上中流の肥沃な旧水田で，国産大豆が広く栽培されています。一方霞ヶ浦周辺水田はハス田に転換され，畦での大豆栽培はなくなりました。

一方，江戸期の利根川水系，霞ヶ浦沿岸では，紀州から銚子を経て醤油醸造法が伝わり，醤油醸造業が野田，土浦などで盛んになり，原料の大豆，小麦，塩が水運によって運搬されました。流域では，商品作物として大豆，小麦が栽培されるようになりました。農家は大豆を醤油や味噌醸造用に出荷しましたが，一部は自家で納豆を造り消費しました。

納豆生産が企業化されたのは明治以後と思われます。都市部では，早朝の蜆売りや納豆売りの売り声で，庶民は目が覚めました。茨城県南地方では，江戸時代から水運と大豆栽培が盛んだったことから，納豆製造業が成長する要件がそろっていました。このように，霞ヶ浦と納豆には深い関係があります。



小川資料館見学

タカノフーズ納豆博物館見学

旧小川河岸は園部川河口に位置し，水戸藩領だったことから，藩米，薪炭，木材などが高瀬船に積載され，霞ヶ浦，利根川，江戸川，中川，小名木川，隅田川を経て，日本橋，蔵前，深川木場，水戸藩御用河岸まで運搬されました。徳川御三家である水戸藩が調達し

た高瀬船の帆には「丸ニ水」のマークが染め抜かれ、「水戸様の御用船」として優先的に舟番所を通過したようです。積出港であった小川河岸周辺では、荷の積み下ろしとその関連業務に従事する人々が住み、豪商が成長していきました。幡谷家（醤油醸造業）、本田家（廻船業、材木商）、伊能家（酒醸造業）などです。これらの豪商は明治以後も活発な商いを続け、新分野に挑戦しながら今日に至っています。このように旧小川町で、水戸藩と関わりが深く、霞ヶ浦の水運で成長した商人の子孫は社会貢献活動を活発に実践していることが大きな特徴です。

商人の町である小川では、本間家（美濃、潮来、小川に縁があり、菩提寺は潮来の長勝寺）が医業を興しました。本間家は医学修練所である稽医館（稽は、よく学び考えるの意味）を設立し、水戸藩の郷校（藩校の分校）としても機能しました。幕末の本間家八世本間玄調（棗軒）は、紀州の華岡青洲、長崎のシーボルトに師事し、最新医学を稽医館、水戸の弘道館（藩校）医学館で講義し、水戸藩領で最初の種痘を実施しました。本間家五世玄琢の生家は、現在、生涯学習施設「やすらぎの里小川」に移築され、現存しています。稽医館は、園部川河口を望む高台の園部城址（小川城址）に設立されましたが、現在は小川小学校が建っています。